

佳作

さあ、前を向こう

宮城県名取市立増田中学校

2年 高橋 花音

未来の私は、この日をどう思い出すのだろうか。この悔しさを。大人は、「人生にはいくつもの試練がある」という。今までの私は、そのことを深く考えることはなかった。だって、私はまだ14歳。明るい未来しか予想できなかったから。でも、私は今、その試練の真ただ中にいる。

8月。結果が振るわなかったら、最後のコンクールにしようと思っていた。来年は受験生。やりたいことはいろいろあるじゃないか。やらなくてはならないことはほかにもあるじゃないか。だから、もしダメだったらバレエの道はあきらめようと決めていた。

(太陽のように明るい“キトリ”になりきろう。全身を使って堂々と。)

そして迎えた本番。舞台は、私の味方にはなってくれなかった。床が滑る。勢いよくジャンプできない。足が床をつかめない。転倒するのではないかと気になって、表現に集中できない。あんなに頑張ってきたのに、自分の踊りができなかった。私の心には、もう誰の言葉も入ってこなかった。先生の厳しい助言も、母のなぐさめの言葉も。

夜、ベッドに入ると、11年分の涙が、とめどなくあふれてきた。ぬぐってもぬぐっても止まらない。

(こんな思いをするのなら、もうバレエなんて踊りたくない。)

私は、楽しかった思い出さえも目の前から消し去ってしまいたい、そんな気持ちになっていた。「努力をすれば必ず報われる」そんなことはないのだ。体中が痛んでも休まずに体を鍛えてきた。足の皮がむけても、ばんそうこうを何枚も重ねてトウシューズを履いた。悲しくてもつらくても、レッスン中は笑顔で踊った。苦手な“パ”を何度練習しただろう。自分との闘いの日々。毎晩帰りは11時過ぎ。眠気と格闘しながら授業に臨んだ。それでも、頑張りは足りなかったのだろうか。私の努力は無駄だったのだろうか。

重い気持ちを抱えながら、教室のドアを開けた。いつものレッスンが始まった。秋には発表会が待っているのだから、休むわけにはいかない。

(あの舞台のことは、今は忘れよう。)

無心になって、ただ、自分の体を動かした。足先を伸ばし、指先まで美しく。そうしているうちに、私から自然と笑みがこぼれた。

(バレエって楽しい。)

踊ることに、あの悔しさに勝る喜びを感じている自分がいた。

もう一度考えた。

(私の努力は無駄だったのか。)

仲間と切磋琢磨して、一緒に舞台を作り上げたこと。先生からトウシューズをもらい、うれしくて朝から晩まで履いていたこと。思い返せば、バレエのこととなると何よりも熱心な自分がいた。いつもいつも楽しかったではないか。あのがむしゃらに頑張った日々が、無駄なはずがない。無駄にするとしたら、それは自分自身なのではないか。

努力って報われるためにするのではない。自分が、ただただバレエが好きだったから頑張れたんだ。頑張ったことを後悔しなくてもいい。この一途な思いは、きっと何かにつながっている。私自身が、これからに生かすのだ。人生は自分の思い通りにはならない。大人がいうように、きっとこれからもいくつもの試練があるのだろう。でも、私は負けない。試練にも、自分の弱い気持ちにも。

未来の私へ。今、あなたが好きなことにひたむきに取り組んでいますか。それは、自分の思うような結果になるとは限らない。かなわない願いなのかもしれない。でも、「あの時頑張ればよかった。」だなんて、努力しなかった自分を後悔することだけはやめよう。私の心に従って、真っすぐに進め。私が私を信じて前進すれば、それはきっと未来につながっているはず。さあ、前を向こう。